

徳富蘇峰記念館

目録 — (22)

教育者の書簡展

展示期間◇平成十七年一月五日〜十一月三十日

本年度の展示は「教育者の書簡展」である。徳富蘇峰へ書簡を送った教育者の人数を『徳富蘇峰宛書簡目録』で調べたところ、来簡者一万二千人のうち、五百余名の名前があった。教育者というと、私の脳裏には正義感の強い、すがすがしい若者の姿が浮かぶ。

本年度の展示テーマが決まった時に、いろいろな方に頭に浮かぶ教育者を尋ねてみたところ、吉田松陰の名がいつも筆頭に上がった。蘇峰（一八六三〜一九五七 文久三〜昭和三十二）と吉田松陰（一八三〇〜一八五九 天保元〜安政四年）は三十三歳の差があり、生きた時代が少し違った。だが蘇峰は、松陰をとてても尊敬し、その業績を高く評価していた。

徳富蘇峰記念館には松陰に関するいくつかの資料が、保管されている。

その一つに、明治二十五年本郷会堂に於いて、蘇峰が吉田松陰という題目で講演した草稿の巻物がある。この講演の骨子は、「第一 国体論」「第二 武士道とは何ぞや」「第三 武士道の楔子」「第四 女子教育の事」である。この吉田松陰に関する講演は、五十年後の昭和十七年前橋中学校に於いて再演された。

展示中の資料として、松陰直筆の色紙「三余説」がある。三国魏の学者 昔蕪遇が読書に適する余暇として冬（一年の余り）、夜（一日の余り）、雨（時の余り）をあげているのに対して、松陰は、自分が獄中にあつても読書ができるのは、冬夜、雨といった天道の常を超越した「君父の余恩」、「日月の余光」、「人生の余命」という「三余」を授かったからであるとしている。

蘇峰は、教育者として吉田松陰を尊敬していた。松陰が「松下村塾」で若者たちを育て

たように、故郷の大江村に「大江義塾」を開き、若者と共に教え学んだ。

明治二十六年に蘇峰は「吉田松陰」を書き上げた。序文は勝海舟が書いている。その後、明治四十一年に改定版が出るに際しては、巻頭の例言で、「新築にも匹敵するような大修繕である」といつている。松陰の門下生である野村靖の五通の蘇峰宛書簡に、「最も嚴密精緻なる批評を下し、且つ著者に対して懇切丁寧なる数回の垂示を」与えてくれたとある。野村が蘇峰の原稿をチェックし、励ましていたことがわかる。

明治四十一年の新著「吉田松陰」について、野村は蘇峰宛書簡で「従来完全なる先師伝あるなく遺憾の至に存居候処、幸に公正なる尊著を閲し、稍悶を排するを得候」と満足いく出来であったことを伝えている。このほか柴田家門・釈宗演などからの賛辞の書簡がある。新著「吉田松陰」は昭和八年六月、一〇五版が明治書院から出版された。

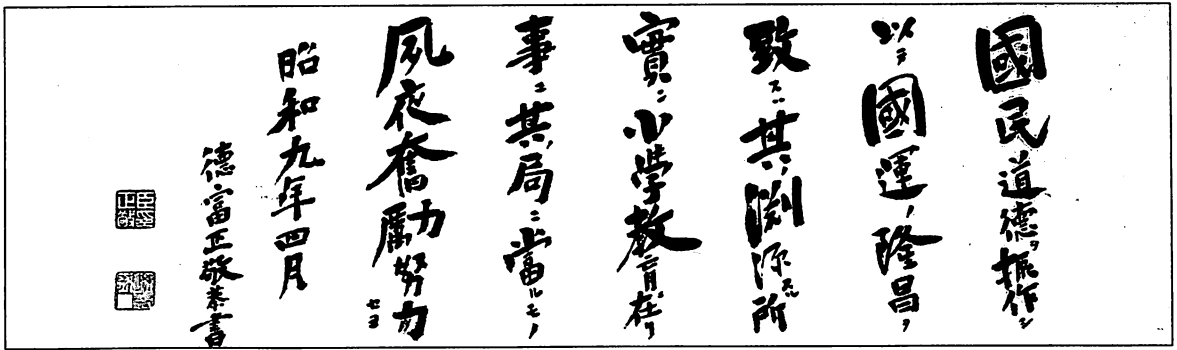
徳富蘇峰記念館所蔵の初版本（明治二十六年十二月二十三日発行）は、蘇峰が父洪水に贈ったもので、巻末には七十三歳の洪水翁の喜びの思いが記されている。同本巻頭には、新著「吉田松陰」が出た後の、明治四十二年二月十四日に蘇峰が感慨を記している。

『吉田松陰』の中で、蘇峰は教育者松陰のようにみている。

彼は天成の鼓吹者也。感激者也。彼は自から己を空ふして、他の善を探るを禁ずる能はさるのみならず、又た他をして自己の精神、意気に同化せしむるを禁ずる能はさる力有す。是れ彼が教育家としての、特色と為す。（中略）彼か一生は教唆者に非ず、率先者なり。夢想者に非ず、実行者なり。彼は未だ皆て背後より人を煽動せず、彼は毎に前に立てて之を麾けり。彼は所謂る己が欲する所を以て、之を人に施せしのみ。彼は弾丸の如し、自ら直前す。彼は火薬の如し、人を焚くに先んじて、自から焚く。身を以て人を率ゆるは、彼か唯一の教育法のみ。

松陰についての蘇峰覚書によると、松陰は佐久間象山の元に弟子入りのため訪ねた際、着流しであったため、弟子の礼を尽くせと言われ、衣服を改め、入門したという。そのことを後に松陰は弟子の一人に「象山という奴は並の奴じゃない」と語ったという。

歴史上の大人物がある時、相手の偉さを認める心に気づき、私は偉人も、生徒になりた人も好きになるのである。



蘇峰揮毫の扁額 昭和9年4月

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
<p>会津 八一 (号・秋草道人など) 1通</p>	<p>1881~1956 明治14~昭和31 新潟県</p>	<p>大正・昭和期の歌人・書家・美術史家。東京専門学校(早大)で英文学を学び、卒論は『キーツの研究』 ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の感化を受け、ギリシャ美術や奈良美術へ趣味、研究を移す。英語教師としてスタートし、その後早稲田大学では東洋美術史を教えた。多くの俳句、俳論を残したがその後短歌活動に移る。生涯独身で通したが、慕う弟子達を厳しく導き、多くの人材を育てた。</p> <p>展示書簡 昭和14年2月9日付 東京市外落合村小学校南隣 (前略)さて小生事天下無名の一老書生にて詠歌の方法をわきまえ不申候へども年来よみすてのもの記憶にまかせて別冊南京新唄と題して試に刊行せしめ候につきては、一部高梧下に御呈上致し候 御閑餘 御一読御叱正候は、光栄に存可申し候 申上ぐるまでもなく 歌は門外漢にて素人芸に過ぎず或は御一嗟の粹にも足り申すまじくと存候。</p>
<p>浅野 総一郎 1通</p>	<p>1848~1930 嘉永1~昭和5 富山県</p>	<p>明治・大正期の実業家。渋沢栄一の援助により官営のセメント工場を無償で借り受け、発展の基礎を固め、後にセメント部門の独占支配を確立。大正9年に浅野中・高等学校を設立。創設時の校長は同志社大学実現に貢献した水崎基一である。当初はアメリカのゲイリー・システムという勤労主義を導入し、学内の一角に設けられた工場による科学技術教育と実用的な語学教育を特色としていた。</p> <p>展示書簡 大正7年の年賀状</p>
<p>跡見 花蹊 (本名・滝野) 1通</p>	<p>1840~1926 天保11~大正15 大坂</p>	<p>明治・大正期の女子教育者・画家。跡見学園創設者。明治8年神田に跡見学校(跡見学園の前身)を開校。上流女子教育機関の草分けとなる。日本古来の婦徳を重んじ、絵画・裁縫など実科を重視する良妻賢母主義的な教育方針は、花蹊の教育の特色となった。さらに「お塾」という寄宿舎を設け、全国から学生を招き入れ、花蹊自身も生徒と寝食を共にした。</p> <p>展示書簡:明治44年10月6日 御尊父様〔蘇峰の父・淇水〕の九十歳の祝い品の清硯、ありがたく家宝にする。(要旨)</p>
<p>井上 円了 (号・雨水) 1通</p>	<p>1858~1919 安政5~大正8 新潟県</p>	<p>明治期の仏教哲学者。仏教と東洋哲学の啓蒙につとめた。明治20年哲学館(のちの東洋大学)を創設。日本の幽霊・占いなどを研究し、お化け博士の異名がある。仏教の認識論に立って迷信・迷妄から解放する活動をした。講演をして全国を巡回、遊説先の大連で急死した。井上が教育で目指した哲学は、「哲学者」の養成ではなく、思想や精神を練磨する術であり、他に応用する能力も身につけなければならないというものである。この精神は「賭学の基礎は哲学にあり」という言葉で、東洋大学に伝えられている。</p> <p>展示書簡 明治()年5月25日 哲学館内の漢学研究会で、支那内地の実況をにつき御高説を拝聴したく熱望している。ついでには幹事を伺わせるので委細はその折にお聞きいただきたい。(要旨)</p>

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
井上 秀 2通	1875～1963 明治8～昭和38 兵庫県	女子教育者。京都府立第一高女卒。家督を相続し、結婚。一男二女の母となる。明治34年開校された日本女子大家政学部入学、同時に寮監も兼ねる。明治37年1回生として卒業、桜風会の幹事長に選出される。働く女性に目をむける活動など、社会的事業の取り組みが目される。明治41年コロンビア大学に留学。家政学や栄養学を学び、翌年シカゴ大学で社会学、経済学の立場から働く女性に関する諸問題を研究した。明治43年帰国し、日本女子大教授となる。昭和6年4代目日本女子大学長(初の女性)に就任。 展示書簡:昭和16年12月15日付 卒業証書授与式御案内
石井 十次 41通	1865～1914 慶應1年～大正3 宮崎県	明治期のキリスト教社会事業家。日本における福祉事業の先駆者。明治17年岡山基督教教会牧師金森通倫氏より受洗。新島襄の「同志社大学設立趣意書」を読み、人材養成には教育が重要であることを再認識する。岡山医学校に在学中、孤児救済を志し、医学書を焼き退学する。明治20年岡山市内に岡山孤児院を設立し、孤児・貧児の保護事業に専念。院児を派遣して宮崎県茶臼原に入植させた。大阪に友愛社という分院をつくり、保育所・夜間学校などの設立にも尽力。石井十次の教育方針は幼年時代(6歳～10歳まで)は遊ばせ、少年時代(10歳～16歳まで)は学ばせ、青年時代(16歳～20歳まで)は働かせるというものだった。妻たつは十次の死後、茶臼原孤児院を守った。蘇峰に宛てたたつの書簡は2通ある。 展示書簡:明治26年8月28日付 岡山孤児院より 新島先生没後の蘇峰の教導に対する感謝の手紙。(要旨)
大隈 重信 14通	1838～1922 天保9～大正11 佐賀県	明治・大正期の政治家。日本の近代化を推進するためには、政党政治の実現と人材の育成が不可欠との認識により、明治15年東京専門学校(のちの早稲田大学)を創立した。明治22年黒田内閣の外相として不平等条約改正のための交渉に取り組むが、玄洋社員来島恒喜に爆弾を投げられて負傷し、右脚を切断する。展示書簡のうち1通は、この事件から8年後の明治30年10月13日付の葉書で「来る十八日は小生遭難第八周年に相当致し、聊か追懐の為め園遊会相催候間同日午後三時早稲田私邸へ御来臨奉希望候」という招待状である。もう1通は明治30年1月27日付で外遊中の蘇峰の帰朝を促す内容である。
大倉 喜八郎 (号・鶴彦) 41通	1837～1928 天保9～昭和3 新潟県	明治・大正期の実業家。大倉財閥の創設者。安政1年江戸に出て乾物店、鉄砲店を開業。戊辰戦争や西南戦争、日清・日露戦争で軍需品の調達・輸送にあたり、巨利を得た。明治35年日本人として最初の対華借款を結ぶ。また渋沢栄一と東京商法会議所を設け、副会頭となった。公共のための文化・教育事業にも力を入れ、明治31年西洋諸国と並ぶ商業の知識・道徳を備える人材を育てるため、私財を投ずることを決意し、明治33年大倉商業学校(現在の東京経済大学)を設立。大正6年には大倉集古館を作り、明治維新時から50年にわたって集めた美術品を陳列公開した。 展示書簡:明治38年9月7日付 (国民新聞社焼き討ちに対する見舞いの手紙) 一両日中の騒擾は言語道断。殊に貴社憤怒のことと拝察。引き続き発刊相成先以安慮した。取り敢えずお見舞いまで。(要旨)
大谷光瑞 (法名・鏡如) 240通	1876～1948 明治9～昭和23 京都	浄土真宗本願寺派の僧。西本願寺の第22世の法主。21世光尊(明如)の長男。歌人九条武子の兄。学習院を退学し、共立学校に入学。明治31年貞明皇后の姉姪(かず)子と結婚。明治44年4月に寺の子弟の育英の為、六甲の別荘「二楽荘」のそばに私費で寄宿会つきの学校「武庫中学」を開いた。英語・漢学・数学に重きを置いた光瑞式教育方法であったという。学生用に一人三枚割当の白い上等の純毛毛布をロンドンに注文するなど、寝具も靴も上等であったという。子弟を教育するという武庫中学の計画は三年で閉鎖された。昭和15年には上海に「策進書院」を作った。 展示書簡:明治44年7月19日付(光瑞自らが撮影した二楽荘の夜景の写真的絵葉書。同封の写真的裏には、「二楽荘全景、長き二棟は貧寺子弟の為に特設せる中学の寄宿舎」と説明がある。) (前略)小生も今春以来一転化を致し、養拙守愚を方針として山荘に蟄居し、専ら子弟の教育に従事致居候。大丈夫に非らずとの御嘲笑は覚悟致居候蟄居生活を継続致居徒ら首都へと上京致さす御憫察被下度候 以上

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
岡倉天心 (本名・覚三) 4通	1862～1913 文久2～大正2 神奈川県	明治期の美術行政家・思想家。居留地(横浜)のジェームス・バラの英語塾で学ぶ。東京外国語学校入学。東京開成学校(校長浜尾新)では、政治学・理財学を学ぶ。英米の小説にも熱中。奥原晴湖について南画を学び、漢詩や琴も勉強した。哲学を学んだお雇い外国人教師アーネスト・フェノロサらに天心の英語力を認められ、日本美術蒐集の通訳として採用される。明治13年文部省に入り、音楽取調掛に任命、明治17年文部省国画教育調査会委員、明治18年美術学校設立準備委員となる。明治20年東京美術学校創立に尽力。美術誌『国華』創刊に携わる。明治34年、自宅での日本美術史の講義がマクロード女史らの心をとらえ、『東洋の理想』のタイトルでイギリスで発表された。明治36年5月29日付の蘇峰宛書簡には、「拙著 ideals of the east この程倫敦に於て印刷致候 一部座右に進呈致候 御寸暇の節 御一覽御教示被下度」とある。
小原 罔芳 32通	1887～1977 明治20～昭和52 鹿児島県	大正・昭和期の教育家。西田幾太郎・小西重直に師事。大正6年、沢柳政太郎らと成城学園の経営に尽力。昭和4年玉川学園を創立し、「全人教育論」の考えを実地に展開した。学問研究を通して真理を探究しようとする姿勢を育てる教育、美なるものを求め、豊かな情操を養う感性の教育、健やかなる身体と自活する生活力を営む教育が大切であると説いた。 展示書簡：昭和11年4月28日 教育学者小西重直の全集を蘇峰が紹介してくれた事に対する礼状。 小西 重直(1875～1948)は戦争孤児に慈善の手を差し延べた教育学者。
海音寺 潮五郎 (本名・末富東作) 1通	1901～1977 明治34～昭和52 鹿児島県	昭和期の小説家。指宿中学に国漢の教師として赴任。中学教師の傍ら、「サンデー毎日」の小説募集に入選。昭和11年『天正女合戦』『武道伝来記』で直木賞を受賞。代表作『平将門』『天と地と』など。 展示書簡：昭和13年10月3日付 村雨退二郎(1903～1959 小説家 鳥取県)と連名「この度は御迷惑なる御願ひをいたしましたにもかゝらず御快諾を賜りまことに有難うございます。」と始まる礼状。「千葉先生の記念碑設立」に関して蘇峰に何かを依頼したようである。「本は確かに拝受。皆感涙」「千葉先生のご霊魂も定めしお喜びであらせらるゝことと存じます」とある。
嘉悦 孝子 (本名・孝) 1通	1867～1949 慶応3～昭和24 熊本県	日本女子教育者。嘉悦氏房の長女。横井小楠門下の父に学ぶ 明治36年私立女子商業学校(後の嘉悦学園)を創立、「怒るな働け」を校訓として掲げ、簿記珠算など女子の商業実務教育を重視した。 展示書簡：昭和17年4月8日付 湘南女学塾 開塾のお知らせと式への参列願ひ 大正13年9月20日付 蘇峰の次男万熊の急逝に対しての、哀悼の書簡
賀川 豊彦 11通	1888～1960 明治21～昭和35 兵庫県	大正・昭和期のキリスト教社会運動家。旧制徳島中学校を経て、明治学院神学部予科、神戸神学校卒。神戸神学校在学中に神戸のスラム街に入ったが救済活動に限界を感じ、アメリカのプリンストン神学校・大学に留学。生涯を社会福祉活動、農民・労働運動、協同組合運動、平和運動などにささげた。「日本のガンジー」と呼ばれ、ノーベル平和賞の候補にも挙げられた。主な著書「死線を越えて」。与謝野晶子は賀川豊彦を詩人と呼んだ。 展示書簡：大正10年8月16日付 御手紙をうれしく拝見して喜んで居ります。私は先生の「人間らしさ」に云ひ知れぬなつかしさを見つけて居ります。それで、あなたが帝国主義者であろうが、皇室主義者であろうが、私には少しもかまいません。南国の若々しい血と詩人的肌合と、先生が私のようなものに面白い話を沢山して下さるその美しい教師として、私は、日本でタツター人の先生を見付けたような気がするのです。(要約)
勝 海舟 (本名・麟太郎) 10通	1823～1899 文政6～明治32 江戸	江戸・明治期の政治家。嘉永3年田町に私塾の蘭学塾を開く。長崎海軍伝習所で海軍についての技術を研究、多くの伝修生を指導した。咸臨丸の船長として太平洋を横断し、幕府の使節とともにアメリカに渡る。帰国後は軍艦奉行となり、幕府の海軍づくりに努力。明治政府になってからは、海軍卿・枢密顧問官などを歴任した。蘇峰は勝を「人間学の大家」として尊敬していた。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
桂 太郎 28通	1847～1913 弘化4～大正2 山口県	<p>明治期の政治家・陸軍軍人(大将) 戊辰戦争に従軍。明治3年兵制研究のためドイツに留学。陸軍の軍令・軍政機構の整備、統一をし、近代的軍隊の確立に努力した。台湾協会学校(台湾協会を母体とし、後に拓殖大学となる)とは日清戦勝により日本が領有することになった台湾開発のための人材を育成するため、明治33年設立され、その初代校長に就任。</p> <p>展示書簡は明治38年9月5日付(ポーツマス条約調印の日に蘇峰の国民新聞社が焼討ちあったときのもの)</p> <p>本日午前以来之都下之情勢遺憾千万なり。午後に至り漸く警察之力不足之感ある故、先以東京衛戍惣督之権限に而取り得らるべき丈け之所置を取らせ居候 明日に至れば更に嚴重之所置に出で、政府の威厳をして遺憾無きに至らしむるの決心なり 右御答迄 且つ社員諸君之勇猛なる決心を承知し不堪感激候也</p>
兼坂 止水 (通称・醇次郎) 1通	1833～1901 天保4～明治34 熊本県	<p>明治黎明期の熊本の異色ある人物。時習館で学ぶ。明治4年帰農の願書を出し、家禄を返した第一号の帰農者としても有名だった。家塾を開き、生徒は百人を超す盛況であった。熊本洋学校でも漢籍を教えていた。蘇峰は明治4年9月に入塾。「全くの異邦人の中に投げ込まれた心地がし」、淋しさと粗食に閉口して、何度も逃げ帰ったことがあり、その度に病身の母久子が駕籠にのって蘇峰を連れ、先生の所に送り届けたという。蘇峰は後に「平民主義と進歩主義を教わった点で感謝している」と述べてる。この私塾は明治9年に廃校。止水はその後製茶業をおこし、伝習生を京都宇治に派遣し技術を習得させ、茶業を営んだ。詩人としても活躍。仙人に憧れ、仙人になる修業をするため、山奥の地へ住みかを移した。行徳拙軒、田代雲_と兼坂止水を熊本の詩人三羽鳥と呼ぶ。</p>
嘉納 治五郎 1通	1860～1938 万延1～昭和13 兵庫県	<p>明治・大正・昭和期の教育家。東大卒。講道館柔道の開祖。柔をもって剛を制すを目的に徳育・知育・体育の三要素を取り入れ、精力最善活用を根本原理とした。明治15年学習院教授となり、東京下谷の永昌寺寺院に道場を開設。明治24年等五高等学校校長、30年高師校長 明治42年クーベルタンのすすめで、日本最初のIOC委員となる。明治44年大日本体育協会初代会長。明治45年ストックホルム五輪に選手二人を連れて初参加。講道館柔道を国際的近代スポーツに高めて、スポーツの父と称された。</p> <p>展示書簡:昭和7年7月10日付 『護国共済会の趣旨に就いて』の小冊子同封 「護国共済会」の評議員委囑願いの手紙。</p>
神田 乃武 1通	1857～1923 安政4～大正12 江戸	<p>明治・大正期の英学者。アメリカに留学、教育を学ぶ。一高教諭及び東大教授。夏目漱石は帝国大学大学院で神田の指導を受けた。明治27年東京外語校長。元良勇次郎、外山正一らと明治22年に正則予備校(のち正則中学、現・正則高等学校)を創立。予備校化した中等教育を「変則」な教育と強く批判して、近代日本を背負って立つ青年たちのために、もっと人間としてひろがりのある「正則」な教育をしなければならないと主張した。正則予備校の卒業生には長与又郎、吉田茂などがある。</p> <p>展示書簡:明治29年5月()日付 16日の徳富・深井氏送別会(明治29～30年の欧米新聞事業視察に対する)にご招待いただいたが、仕事の都合で伺えないという内容。</p>
木下 広次 2通	1851～1910 嘉永4～明治43 熊本県	<p>明治期の教育者。パリ大学に留学して法律を学ぶ。帰国後文部省に入り、のちに東大教授、一高校長を歴任。明治30年京大が創立されると同時に、初代総長となる。剛直の人で学校管理に長じた。</p> <p>展示書簡:明治33年1月2日付 国民新聞発刊3000号記念を祝った手紙。</p>

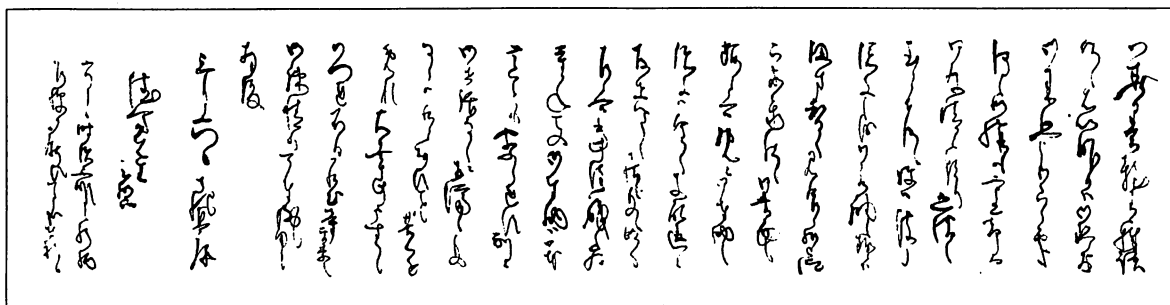
氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
国木田 独歩 (本名・哲夫) 3通	1871～1908 明治4～明治41 千葉県	明治期の詩人・小説家。東京専門学校(早大)中退。独歩が蘇峰を見識したのは、明治24年「青年文学会」においてであった。明治26年8月21日付蘇峰宛矢野龍溪書簡で矢野が「佐伯中学の英語教師の紹介」を蘇峰に頼み、蘇峰の紹介でその年の9月に独歩は佐伯に赴く。矢野龍溪の手紙には就任の条件として「期間は壹ヶ年期」「給料は25円」「おもに英学教授」「人物は確とせし者を上とし、温順を次とし(漢書を相応に読み候得ば幸い)宗教趣味だけは避け候方也」とある。独歩は約2年間佐伯で英語教師をした。大志を抱きながら恵まれず、38歳で茅ヶ崎の南湖院にて永眠。 展示書簡:明治41年5月7日付の葉書(この葉書から2ヶ月足らずで亡くなった。) 又もや佳葉御恵送下さり有難く存候。昨日は又洪水老先生御見舞下され有難く存候。87才の御老体にして実に壯夫の態あり 来年米の御祝まで小生も如何しても生き度き者と存候
グリフィス (William Eliot Griffis) 1通	1843～1928 天保14～昭和3 アメリカ	アメリカの教育者。明治3年に越前福井藩の招きで、お雇い教師として来日、のち大学南校で理学・化学を教授。開成学校化学科の創設に尽力した。日本史も研究し、著書に『皇国』『ミカド制度と人格』などがある。 展示書簡:明治42年4月12日付 蘇峰の著書『吉田松陰』を贈られた際の礼状
黒板 勝美 (号・虚心) 11通	1874～1945 明治7～昭和20 長崎県	明治後期・大正・昭和期の歴史学者。東京帝国大学史料編纂員となり、東京大学講師をへて助教授、大正8年教授となる。明治38年ドイツに留学。日本古文書様式論で文学博士となる。日本古文化研究所所長。エスペラント語の開拓者。 展示書簡:大正5年4月22日付 本文は園城寺長吏公胤僧正の筆跡に関する内容で、二伸にはエスペラント第三大会に対し何か一筆いただければ幸甚という願状である。(要約)
黒田 清輝 1通	1866～1924 慶応2～大正13 鹿児島県	明治・大正・昭和期の画家。日本の近代洋画の父と称される。島津藩士の子として生まれる。伯父の子爵黒田清綱の養嗣子となる。明治17年法律を学ぶために渡仏。パリで画家の山本芳翠や藤雅三、美術商の林忠正らに会い、画家へ転向。画家ラファエル・コランに師事する。明治26年帰国。帰国後はヨーロッパの先進教育を指導する美術教育者としても活躍し、東京美術学校教授、貴族院議員、帝国美術院院長などを歴任した。代表作「湖畔」「智・感・情」など。 展示書簡:大正13年9月30日付 蘇峰の父一敬の90歳の祝いの品に対する礼状(要旨)
小泉 信三 3通	1888～1966 明治21～昭和41 東京	昭和期の経済学者・教育家。大正1～5年慶応義塾の命によりヨーロッパ各国に留学。帰国後、慶応義塾教授となり、経済学史・社会思想史の講義を担当し、昭和8年慶応義塾塾長に就任し、親子二代で塾長となる。以来藤原工業大学長も兼ねる。帝国学士院会員。戦災で重傷を負ったが、敗戦後も活動を続け、皇太子明仁親王(現天皇)の教育にあたり、立憲君主としての心構えを新時代の帝王学として説いた。 展示書簡:昭和19年5月30日付 『言論報国』3月号に掲載された「蘇翁漫談」の中で、蘇峰が福沢を批評した部分に対する小泉の抗議の書簡。同じ日付で5月10日付の「三田新聞」第546号が送られてきた。
古在 由直 1通	1864～1934 元治1～昭和9 京都府	明治・大正期の農芸化学者・農学博士。明治19年駒場農大を卒業し、22年東京農林学校教授、翌23年農科大学助教授。明治28年よりドイツ(ライプニッツ大学)に留学し、32年には農学博士となり、帝国大学農科大学教授に任ぜられた。足尾銅山鉱毒調査では銅汚染を実証し、世論を喚起。また日露戦争時は非常時農業対策に参画。大正9年東京帝国大学総長になり、14年に再選。その剛毅果敢な気質と正義感あふれる行動で、任期中に起きた関東大震災で大きな被害を被った大学の復興事業を先頭に立って成功に導いた。 展示書簡:大正15年3月2日付 東京帝国大学史料編纂事業に蘇峰所蔵の古文書を借用した礼状で「東京帝国大学総長農学博士」とある。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
後藤 新平 (号・樓霞) 49通	1857～1929 安政4～昭和4 岩手県	<p>明治・大正期の政治家。福島須賀川医学校で学び、明治14年には愛知県立病院長、愛知医学校校長も務める。内務省衛生局時代に在官のままドイツに自費留学し、明治25年ミュンヘン大学で学位を取得。後藤が手がけた教育事業には信州で開設された「夏期大学」がある。これは「大学」という名を冠した日本で最初の社会教育事業であった。また「学者をして成るべく社会に接近せしめ」という後藤の理念を実現するために「通俗大学会」を設立した。後藤が総裁を務め、会長には新渡戸稲造が就任し、『通俗文庫』を刊行したり、巡回講演を行った。大正9年将来の対ソ政策に資する人材育成の場としてハルピンに日露協会学校を設立した。満州建国の年に「ハルピン学院」と名称を変え、文部省が管轄する四年制の専門学校となった。その後満州国立大学・ハルピン学院と名を変えたが、昭和20年8月16日満州国皇帝溥儀が退位を宣言した日に閉校した。後藤は昭和4年に急逝するまで拓殖大学学長を務め、専門学校であった拓殖大学を正式の大学に昇格させるなど、拓殖大学発展の基盤を確立した。</p> <p>展示掛軸：徳富仁兄大人雅囀 明治戊申(41年) 秋 (目録21に既掲載)</p>
西園寺 公望 (号・陶庵) 37通	1849～1940 嘉永2～昭和15 京都	<p>明治・大正・昭和期の政治家、公爵。最後の元老。ソルボンヌ大卒。明治2年京都御所の邸内に私塾「立命館」を開設したが、太政官の命により閉鎖を余儀なくされた。明治4年渡仏し、アコラスに法学を学び、クレマンソーらと交遊。また中江兆民らを知る。帰国後、第3次伊藤内閣の文相。在任中教育勅語の改変を意図し天皇の内諾を得るなど、開明的教育方針を採る。明治33年立命館大学の前身京都法制学校設立を後援。「自由と清新」という建学の精神を掲げる。</p> <p>展示は軸物 『文章徑國 八又三』</p>
沢柳 政太郎 5通	1865～1927 慶応1～昭和2 長野県	<p>明治・大正期の教育行政官・教育学者。帝国大学文科大学卒。初め文部省総務局に勤め、森有礼・榎本武揚らの下で働く。文部省学務局長として普通教育制度の原型を確立。京都帝大総長るとき、教員の任免権をめぐる教授団と対立、文部省が教授任免に関する教授会の権限を認めて引責辞職した(沢柳事件)。また、高等教育に関する理想と抱負を実現するため、成城学園を創設した。</p> <p>展示書簡：東京高等商業学校の封筒使用 明治()年10月26日付 東京高等商業学校の学生が組織した一橋会研究部会における演説依頼の手紙。(要旨)</p>
渋沢 栄一 14通	1840～1931 天保11～昭和6 埼玉県	<p>明治・大正期の実業家。父から『論語』を学び終生の指針とする。家業に従事した後、江戸に出て尊王攘夷運動に加わる。一橋家に仕え、慶応3年に徳川慶喜の名代としてパリ万国博覧会に赴いた徳川昭武に同行。西洋の近代的産業設備や経済制度を学ぶ。明治元年静岡に合本組織(株式会社)の先駆 商法会所を設立。大蔵省に出仕の後、明治5年日本初の銀行、第一国立銀行を創設。明治8年に日本で最初の商業教育学校である「商法講習所」が京橋に誕生。明治17年には官立の東京商業学校へと成長するなど「実業教育」の創設にも力を尽くした。東京商業学校は後の一橋大学となる。引退後は教育・社会・文化の各方面の社会・公共事業等に力を注いだ。</p>
清水 安三 1通	1891～1988 明治24～昭和63 滋賀県	<p>大津の中学時代に受洗し、同志社神学校に進む。大正6年日本組合基督教教会宣教師として中国に渡航。北京に崇貞学園を設立。オハイオ州オベリン大学に1年間留学後、同志社大学で5年間講師を勤める。郁子夫人とともに、桜美林学園(オベリン大学の名に由来する)を創立。</p> <p>展示書簡：昭和13年4月3日付蘆花恒春園の絵葉書 肅啓 留学生五名伴ふて上京致しまして、蘆花先生の展墓致しました。先生に敬意を恒春園より拝呈致します。</p>

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
<p>下田 歌子 (本名・平尾せき) 8通</p>	<p>1854～1936 安政1～昭和11 岐阜県</p>	<p>明治・大正・昭和期の女子教育者。「歌子」の名は歌才にちなみ正憲皇后から受けた。明治5年～7年間宮中に仕仕。明治14年桃天(とうよう)女塾を創立し、華族の子女を教育。明治18年、華族女学校(学習院女子部)校長となる。広く婦徳を説き、明治31年帝国婦人協会を設立、会長となる。女子高等普通教育のため「実践女学校」を、女子職業教育のため「女子工業学校」を創立し、実践学園の校長をつとめた。</p> <p>展示書簡:明治33年12月13日付 (蘇峰の娘の学習院入学に関する手紙)是非とも一日も早く御入学のやうに、取り斗らひ度候へ共、何分一名も欠員之無 実は年末又八歳且二八小学初学年二八欠員数名有之候へ共 他ハすべて満員二候俟今しばらく御待被度 来春は何とか待かた丈ハ都合致しさし上度と私限り存居候次第 悪しからず思召 第一二御身体の御接養 第二二御無理なき程度ニ於てそれゝ御予備御修学のほど念じ上候</p>
<p>杉浦 重剛 (号・梅窓) 1通</p>	<p>1855～1924 安政2～大正13 滋賀県</p>	<p>明治・大正期の思想家。藩校で学んだ後、明治3年藩の貢進生に選ばれ、大学南校に派遣された。黒田麴廬(明治期の語学者・ロビンソークルーソー漂流記の最初の翻訳者)に師事。1年半に渡り漢学のほか英語、蘭語、仏語、数学、理化学、天文学を学ぶ。黒田に「蘭学は時代遅れだから英仏独のいずれかを学ぶように」と言われ、明治10年、文部省留学生として英国に留学。英国では物理・化学・数学などの理系を学んだ。明治13年帰国。東京大学予備門長に就任(予備門は後の第一高等学校)。文部省参事官、など学校教育行政を担当し、高等教育振興につとめた。明治21年、政教社の結成に参加、雑誌「日本人」や新聞「日本」を発行し、日本主義思想の啓蒙を行う。その後東京文学院設立、国学院学監、東亜同文書院院長、日本中学校長などを歴任し教育に力をそそぐ。大正3年東宮御学問所御用掛に就き、倫理を担当した。</p> <p>展示書簡は、上野公園で開かれた明治43年1月国民新聞社主催の「維新志士遺墨展覧会」への杉浦の出品物返却の礼状。</p>
<p>鈴木 達治 (号・煙洲) 91通</p>	<p>1871～1961 明治4～昭和36 愛媛県</p>	<p>横浜高等工業学校(現横浜国大工学部)創立時の校長。三無主義(無試験・無賞罰・無採点)の教育を確立した。ユニークな教育方針は評判が高かった。隠棲後、鈴木の子自由教育の高風を永遠に伝えるため校庭に碑が建立された。その碑名「名教自然」の揮毫を最初蘇峰に依頼したが、「君の学校の庭に立つ石に書くのだから、いくら悪筆でも誰も文句を言うまい」と鼓舞されたので、鈴木自ら悪筆を振るったと告白している。碑背の撰文は蘇峰、書は原三溪である。記念碑の除幕式には蘇峰も招かれ賛辞を述べた。卒業式には、蘇峰や後藤新平、金子賢太郎などが特別講演をした。</p> <p>展示書簡:昭和13年3月19日付</p> <p>拝白 陳は今夕刊にて先生の御執筆自由教育の実行を拝読いたし、先生の御温情ニ全く感激いたし申候 次ニ小生はハ明治十九年ニ同志社ニ入学致し候へ共幼少の事とて、新島先生ニハ一度も直接ニ御警咳ニ接し不申候 只高風を思慕するのみニ御坐候 先生ニより新ニ御紹介を受けたる様ニ実感いたされ申候 益奮励自由教育ニ努力可致候</p>
<p>外山 正一 3通</p>	<p>1848～1900 嘉永1～明治33 江戸</p>	<p>明治期の教育者・哲学者。16歳で開成所教授方に任ぜられる。慶応2年中村正直らと英国に留学。明治3年渡米。ミシガン大学で学ぶ。明治9年帰国して東大教授。明治30年東大総長。欧化主義のもとに漢字排斥を主張し、羅馬字会を創立。井上哲次郎らと合著『新体詩抄』(明治15)は当時大きな影響を与えた。音楽・演劇を論じ、女子教育を奨励し、贈答廃止会をつくり、公立図書館の整備などを主張・指導する、(行動する知識人)だった。正則予備校創立者のひとり。</p> <p>展示書簡:明治33年1月 「拙著教育制度論一部進呈致候」という印刷の封書</p>

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
高田 早苗 (号・半峰) 1通	1860～1938 万延1～昭和13 江戸	明治・大正・昭和期の教育者。天野為之(1861-1938)市島謙吉(1860-1944)坪内逍遙(1859-1935)と共に「早稲田の四尊」と呼ばれる。明治15年小野梓に従って大隈重信の改進黨結成、東京専門学校(早大)創設に参画。同校で英国憲法史やシェークスピアを講ずるかたわら、小野梓没後は同校経営の中心に立つ。同時に政界にも進出。第一回の総選挙に全国最年少で当選し、第一次大隈内閣で外務省通産局長を、第二次大隈内閣では文部大臣を務める。大隈亡き後、早大総長として、近代的私学経営の途を開拓した。 展示書簡:() ()年1月25日付 来る二月十二日午後二時本大学雄弁会開催二付会員一堂が先生のご出演を熱望している。 (要旨)
竹崎 順子 1通	1825～1905 文政8～明治38 熊本県	明治期の女子教育者。蘇峰の伯母。16歳で横井小楠の弟子竹崎茶堂と結婚し、明治5年に私塾日新堂を開き、師弟を教育。明治20年に海老名弾正によりキリスト教受洗。明治21年キリスト教系熊本女学会(22年に熊本女学校と改称)の舎監に招かれ、明治31年熊本女学校校長に就任。慈愛に満ちた女子教育を全うした。順子は明治30年平民主義を唱えていた蘇峰が参事官に就任し、変節漢と呼ばれ世間の信用を失った時「わしはそうは思わぬ」と蘇峰を信じた。 展示書簡 明治29年5月20日 外遊出立を馬関から見送る。先々からの御報楽しみにしている。(要旨)
角田 柳作 4通	1877～1964 明治10～昭和39 群馬県	アメリカにおいて日本学を育てた先覚者。司馬遼太郎は『街道をゆく ニューヨーク散歩』の中で角田のことを「無名の巨人」と称した。東京専門学校(早稲田大学)卒。明治29～30年東京民友社編集部に勤める。幸田露伴の序文つきで『井原西鶴』を民友社から出版。明治32年～35年京都真言宗中学林で英文学・社会学を教える。明治42年～大正6年、ハワイへ渡り、ホノルルのハワイ中学校長となる。大正6年アメリカに渡り、コロンビア大学で学ぶ。昭和3年コロンビア大学内に日本文化研究所(後に日本資料館)を創設、所長となる。資料館の図書収集のため何度も訪日。昭和12年にはコロンビア大学、中国・日本学部講師となる。開戦直前の昭和16年ドナルド・キーンは角田の日本思想史の講義を受けたが、生徒は一人であったようだ。ハワイホノルルで客死(87歳) ホノルルで葬儀の後、東京築地本願寺で追悼会。コロンビア大学でも追悼礼拝。 展示書簡:昭和5年12月3日 クリスマスカード ニューヨークより
坪内 逍遙 (本名・雄蔵) 20通	1859～1935 安政6～昭和10年 愛知県	明治・大正期の評論家・小説家・劇作家。東大。別号に春の屋隴など。早くから歌舞伎に親しみ、江戸文学を耽読。大学で英米の新知識を学ぶ。明治16年から親友高田早苗のすすめで、早稲田の大学の前身東京専門学校の教師をつとめながら小説を書く。初等中等教科書の編纂事業にも力を尽くした。その成果について蘇峰の批判を乞うている書簡と坪内が監修した『国語読本 尋常小学校用 第一・第二』(明治34年富山房蔵版)を展示している。 展示書簡:明治34年1月10日付 小生儀先年采研か心を普通教育の事に傾け、その手始めとして別冊小学読本編輯相試み候。自家の希望にすら副はざる不束なる著作に候へども、世間普通の読本類の欠陥は多少補ひ得たる心得に御座候。何卒御閑散の節他の読本と御比照の上御一覽被下、不備の廉々十分御指教の程切に奉願候。文部省令の制限もむつかしく、国語上の諸問題なども未だ解決せられざる今日の事とて、材料文章共に著者が心まゝにも相成がたく、随て本書の出来栄も一段不満足に候へども、『編纂要旨』御参照被成下御腹蔵なく御批判を賜はり候はゞ、著者は申すに及ばず教育界の大幸に御座候。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
デントン Mary Florence Denton 3通	1857～1947 安政4～昭和22 アメリカ・ ネバダ州	同志社女子部の母。加州バサデナの小学校に在任中の明治20年、一時帰国中の同志社教師宣教師ゴルドン博士夫妻に勧められ、同志社への赴任を決意。60年の長期に渡り同志社教師として女子教育に尽力し、数多くの功績を残した。 展示書簡：昭和18年7月3日付 貴重な本ありがとうございました。(中略)この貴重な本の中であなたが書いてあることすべてに賛成です。そのことに心より感謝しています。1776年7月4日私たちアメリカ人の父祖たちは、ほとんど同様のメッセージをアメリカ人に書きました。歴史は繰り返すものです。あなたには千遍感謝いたします。というのは、なぜ日本が歴史に残る勅語を発したか、はっきりと雄弁に語ってくださっているからです。私は教育勅語を愛しています。そしてこの1941年12月8日の(宣戦)詔書は、明治天皇陛下が教育勅語の中で示されたものを論理的に引き継いでいると感じています。(後略) (訳：澤田次郎氏)
土肥 樵石 (本名・直康 号・宇宙など) 3通	1842～1915 天保13～大正4 熊本県	明治期の書家。熊本の生んだ書家として当代随一といわれ、池辺三山と並び称される。時習館で学ぶ。書は和田耕雲、経書は元田永孚に学んだ。学問の師である元田が書を樵石に教わるといふ関係になり暇さえあれば樵石をよんで習字の稽古をしたという程、ふたりの交情は深かったという。先に東京に出ていた元田は樵石の熊本での生活が苦しいのを知り、上京を促し、宮内省に推薦し書道で華族女学校に勤める事になった。女子美術学校でも教えた。明治37、8年頃早稲田で清国人相手の学校(弘文書院)を開いていた嘉納治五郎は、卒業証書の書き手を文字の国の清国人の人に渡すものであるからと、いつも土肥樵石と決めていた。明治の外交官、漢学者であった竹添進一郎も日本を代表する書家として、清国の人に樵石の書を贈ったという。後藤新平も樵石の書に心酔していたひとりで、台湾総督府時代の書は橋の名などの字に至るまでほとんど樵石に書いてもらったという。官をやめてからも神田猿楽町に住み、書道を教え、門人数千人と伝えられている。教授方法は筆法・理論・運筆であった。日本の新劇で活躍した土肥春曙は彼の息子である。 展示書簡：明治28年3月6日付 徳富一敬(蘇峰の父)宛で寺に奉納の添文に関する内容。



徳富一敬宛 土肥樵石書簡 明治()年3月6日付

留岡 幸助 110通	1864～1934 元治1～昭和9 岡山県	明治・大正・昭和期の社会改良家。キリスト教に入信。同志社神学校を卒業。丹波第一教会牧師。監獄改良の志を貫くため、明治24年北海道空知監獄の教諭師となる。明治27年渡米し、感化事業を学び、その後巣鴨監獄の教諭師となり、巣鴨に不良少年感化のための家庭学校を創設。北海道の北見や神奈川茅ヶ崎に分校を設けた。 展示書簡：大正11年9月19日(北海道北見家庭学校農場よりの礼状) (前略)過日は御繁忙中遠路御来場及び種々幣農場の為に御高配難有く感謝に絶ない(中略)先生御夫婦の御来場が幣農場の進歩の一時期を画するよう致し度ものと存候
---------------	-----------------------------	---

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
中江 兆民 (本名・篤介) 41通	1847～1901 弘化4～明治34 高知県	<p>明治期の民権思想家・政治家。幼名を竹馬。別号を秋水など。長崎・江戸で仏語などを学び、後フランスへ留学。明治7年帰国。外国語学校校長を勤めたのち、東京麹町の自宅に私塾仏蘭西学舎(のち仏学塾、明治19年廃校)を開き、フランス流民権思想を教えた。著書『民約訳解』『社会契約論』の漢訳・解説版、『三酔人経綸問答』『一年有半』『統一年有半』。門人に幸徳秋水らがいる。展示書簡は蘇峰がパリで客死した酒井雄三郎の事を『国民新聞』に「酒井雄三郎氏の逝去」と題して、紹介するにあたり、兆民に酒井の人物評を尋ね、翌朝兆民から届けられたもの。</p> <p>展示書簡:明治33年12月15日付</p> <p>酒井は読書家なれども文学家と申すよりは寧ろ哲學家にて、哲學家としては希臘哲學者の如き、性行を具え居りたる様である。また無頓着は天性にて、大隈伯邸に参りても、玄關にて取次ぎを請わずすぐに居間に通るなどの行為は自然の行為の様に見えた。このような性行をご推察ください。(要旨)</p>
中村 不折 5通	1866～1943 慶応2～昭和18 東京	<p>明治・大正期の洋画家・書家。母の郷里長野で育ち、絵(南画)を学ぶ。明治17年、19歳のとき、郷里高遠の小学校助教員(代用教員)に採用された。教師時代3年間で蓄えたお金を持って絵を勉強するため、明治20年上京し、小山正太郎、浅井忠について洋画を学ぶ。明治34～38年滞仏。アカデミー・ジュリアンでジャン・ポール・ローランスに師事。帰国後は太平洋画会会員、同研究所教師となる。昭和9年太平洋美術学校校長。書にも造詣が深く、六朝書に傾倒し、独特の書をかいた。森鷗外が自分の墓の文字は不折の書を刻むことと遺言した。長野県穂高の萩原礫山の墓碑も不折の書である。碑板法帖の収集に努め、昭和11年書道博物館を創立した。</p> <p>展示書簡:雄山閣より書論及び所蔵の碑帖の複製等を依頼されたので、先生の御一文を賜りたい。(要旨)</p>
中川 小十郎 3通	1866～1944 慶応2～昭和19 京都	<p>明治・大正・昭和期の文部官僚・教育家。東大卒。明治27年西園寺公望文相の秘書官から、京都大学書記官として京大創立事務に従事。明治33年京都法制学校(現立命館大学)創立。学長に就任。大学時代は夏目漱石、正岡子規、南方熊楠らと同窓だったが、中でも漱石とは終生親交があり、漱石の作品『落第』に中川が登場するほどであった。</p> <p>展示書簡:昭和13年8月10日付 静岡県西園寺公別邸より静養中の西園寺の命により書いた挨拶状。蘇峰が執筆中の西園寺公爵壮年時代の北越入りの一節に関して、昔年のことが感慨深く偲ばれるという内容。(要旨)</p>
夏目 漱石 (本名・金之助) 1通	1867～1916 慶応3～大正5	<p>明治・大正期の小説家。明治28年東京帝国大学卒業後、東京高師、松山中学、五高などで英語、英文学を教える。明治33年イギリスに留学。帰国後一高、東大各講師、東京帝国大学で英文学の教鞭をとる。明治40年教職を辞し、池部三山の要請で朝日新聞社に入った。大正3年学習院の講演に呼ばれ、「私の個人主義」と題して上流の子弟の前に留学とその後を語った。研究評論・講演・談話などで重要な問題提起をした優れた思想家・文明評論家としての役割も果たした。文相から授与された文博の学位を辞退したことは、漱石の人柄を示すものとしてよく知られている。漱石は自宅において開いた「木曜会」では人間の教師として若き人々と語り合った。</p> <p>展示書簡は明治42年2月9日付(蘇峰が明治42年に復刻した五山版『百人一首』への礼状。漱石山房の原稿用紙使用)</p> <p>ご刊行の横川和尚が撰した五山の僧による『百人一首』二百部のうち(実際には300部刊行)、第150号を高浜虚子から受け取り、ありがたく御礼申し上げる。日常お忙しいなか、このような風流な仕事に月日をお使いのご余裕、羨ましい。正にこれ雪村老漢の「銀湯炭炭起清風」の一句に相当するものと思う。</p>
成瀬 仁蔵 2通	1858～1919 安政5～大正8 山口県	<p>明治・大正期の女子教育家。山口県教員養成所卒。小学校長など歴任し、明治10年キリスト教に入信。明治11年大阪梅花女学校教員。明治15年辞職。牧師として布教活動に従事し、新潟に新潟女学校・北越学館を設立。明治23年アメリカに留学して、女子教育を研究。帰国後大阪梅花女学校長となる。雑誌『女子教育』を創刊し。明治34年、日本女子大を東京に設立し女子教育に専念した。生涯独身を通じた。</p> <p>展示書簡:明治40年6月14日付</p> <p>創立時代よりのご深厚とご同情に感謝する。一度近状を見ていただきたく、御繰合の上御来臨いただきたい。同日は生徒の調理した夕飯を差上りたいので用意の都合上来臨の有無を教えて欲しい。(要旨)</p>

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
新島 襄 13通	1843～1890 天保14～明治23 江戸	明治期のキリスト教の代表的教育者。元治元年密出国してアメリカに渡り、10年間滞在。アマースト大、アンドーバー神学校で学ぶ。明治8年同志社英学校を開校。教員は新島襄とJ.D.デイヴィス、生徒は8人であった。明治9年熊本洋学校に学んだ生徒(熊本バンド)約35人が入学。蘇峰もその一人であった。明治21年11月「同志社大学設立の旨意」を全国の主要な雑誌・新聞に発表。井上馨・大隈重信・渋沢栄一・岩崎弥之助らから寄付金が集まった。明治23年1月23日大磯百足屋旅館で亡くなる時、遺言の口述筆記をしたのが徳富蘇峰であった。10か条の遺言には、「教育とは愛である」という新島の精神が述べられている。 展示書簡:明治22年12月28日(亡くなる1ヶ月前の葉書) 昨日は御繁劇中御見送り被下深く奉拝謝候 着後至テ気分も爽快ヲ覚候間 乍憚御休意被成下度 猶人見君二も宣布御鶴聲の程奉希上候 忽々不宣 十二月廿八日 大磯むかでや 新島襄
新島 八重 6通	1845～1932 弘化2～昭和7 会津	明治・大正期の教育事業者。新島襄の妻。兄は山本覚馬。明治4年失明した兄・覚馬を助けるため会津から京都に赴き、生活を共にする。キリスト教宣教師のゴルドン博士から聖書を習い、京都女紅場(現府立第一女子高)の女教員を務める。米国帰りのキリスト教徒・新島襄と知り合い共鳴し、私有地、財産を襄に提供し、明治8年結婚。同志社を創立。 展示書簡:明治23年3月5日付(黒枠の封筒使用) 新島襄の生前より死後にいたるまでの、蘇峰の厚情に感謝する手紙。
新渡戸 稲造 3通	1862～1933 文久2～昭和8 岩手県	明治・大正・昭和期の教育者。札幌農学校卒業後、東大文学部に選科生として入学し、英文学・理数学・統計学を専攻。ジョンズ・ホプキンス大(アメリカ)、ボン・ベルリン・ハレ(ドイツ)の諸大学留学。明治24年帰国、札幌農学校教授、京大教授を経て、明治39～大正2年一高校長として学生に深い人格的影響を与えた。大正3年東大教授となり植民政策講座を担当。大正7年東京女子大初代学長となる。展示書簡は明治29年5月29日付で3メートルに及ぶ長文の書簡。深井英五宛。蘇峰と深井英五が外遊する際に、アメリカで面会したらよいと思われる各界の著名人を紹介した内容。
鳩山 春子 4通	1861～1938 文久1～昭和13 長野県	明治・大正・昭和期の女子教育者。父は旧松本藩士。明治7年上京し、竹橋女学校入学。同校廃校後、東京女子師範学校へ移り、特別英語科、師範科本科卒業。明治14年には母校の教員となり、米国留学帰りの法律学士鳩山和夫と結婚。明治19年共立女子商業学校、明治28年には女性を対象とした通信教育・大日本女学会の設立発起人となる。政界入りした夫・和夫の妻として、政界や社交界とつながりをもつ。多くの婦人団体に名を連ねた。また熱心な家庭教育で近代的良妻賢母の典型といわれた。昭和10年共立女子学園長となる。 展示書簡:昭和13年5月 共立女子専門学校校長、共立高等女学校校長、共立女子職業学校校長として、第48回生徒製作品展覧会開催の案内状。
羽仁 もと子 2通	1873～1957 明治6～昭和32 青森県	大正・昭和期の女子教育者。自由学園創立者。東京府立第一高女、明治女学校で学ぶ。校長磯本善治の好意で『女学雑誌』の仕事を手伝い、矢島楯子ら教育人・文壇人と知り合い、植村正久の説くキリスト教にも感銘を受けた。小学校、女学校の教職に就く。明治30年報知新聞社入社。「婦人の素顔」という訪問記事を任され、日本最初の婦人記者として活躍。羽仁吉一と職場結婚し、退社。明治36年『家庭の友』(のちの『婦人の友』)を発刊。中流家庭を対象に簡素で合理的な生活様式を提唱し、多くの主婦に影響を与えた。大正10年吉一の協力を得て自由学園を創立。初等・中等・高等各部の女子教育機関として、学園に雇人をおかず、すべて生徒の自主・自治に任せる生活中心の教育を行った。 展示書簡:昭和17年4月22日付 自由学園の卒業式案内
浜尾 新 (本名・貞次郎) 8通	1849～1925 嘉永2～大正14 兵庫県	明治期の教育学者。藩命により英・仏学を学ぶ。維新後、明治5年大学南校の中監事、東京開成学校校長心得をへて、東大副総理として創立当初より東大とともに歩む。この間文部省より学術制度取調のためヨーロッパに派遣される。明治26年東大総長、明治30年には第2次松方内閣の文相となる。文部省学務局長もつとめ、教育改革の一環として美術教育振興のため、上野に美術学校(のちの芸大)を創立。 展示書簡:大正5年12月4日付 国民新聞社長徳富猪一郎殿宛 東宮大夫男爵浜尾新より小学生選書帳一冊を皇太子殿下へ献納した時のお礼の書状

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
平山 成信 12通	1854～1929 安政1～昭和4 東京	<p>明治・大正期の官僚。明治6年ウィーン万国博覧会に事務官として出張。第一次松方内閣の書記官長となる。その後、宮中顧問官、行政裁判所評定官をへて、枢密顧問官となる。一方日本赤十字創立以来その理事となり、社長となる。産業協会、帝展の創立などに尽力。帝国女専、日本高女、静修女学校などの校長として、女子教育に努めた。</p> <p>展示書簡：大正6年6月2日付 知友と共に月刊雑誌「江戸」を発行したので別便にて送ります。国民新聞紙上でご批評いただければ幸いです。(要約)</p>
フルベッキ Guido H.F.Verbeck 1通	1830～1898 天保1～明治31 オランダ	<p>幕末・明治期の宣教師・教育者。オランダに生まれ、嘉永5(1852)年にアメリカに渡る。神学校に学び敬虔キリスト者となる。安政6年に宣教師として来日。長崎では済美館の英語教師をつとめ、元治1年校長となる。慶応2年長崎に設けられた佐賀藩の致遠館で、大隈重信や副島種臣ら多くの俊英を育成した。明治政府の成立後、東京に出て大隈らの推薦で開成学校・華族学校・明治学院の教師や政府の翻訳顧問などをつとめ、さらには旧約聖書翻訳委員やナポレオン法典を紹介するなど多面的に活躍した。</p> <p>展示書簡：明治30年7月 湯浅・徳富宛 富士見軒で催される晩餐会に体調不良で残念ながら欠席するという詫言状(要約)</p>
本多 庸一 9通	1848～1912 嘉永1～明治45 青森県	<p>明治期のキリスト教指導者。横浜のブラウン塾やバラー塾に学び、明治5年バラーから洗礼を受ける。東北地方伝道を志し、東奥義塾を再興し、明治19年弘前公会を創立。その後メソジストに転じる。新時代の思想・制度研修のため渡米し、ドルー神学校に学び、この時に教育と宗教に生涯を捧げる決意をした。明治23年、青山学院院長となる。武士道の謹厳さと、キリスト教の柔和さをもち「慈父の如き先生」と慕われ、17年間にわたり院長として学院発展の基礎を固めた。日本メソジスト教会初代監督に就任し、青山学院名誉院長となった。</p> <p>展示書簡：明治43年1月31日 平壤日本メソジスト教会村田重次より届いた韓国事情をお知らせする。ご指導などよろしく。(要旨)</p>
松本 荻江 (本名・むつ) 2通	1851～1899 嘉永4～明治32 埼玉県	<p>明治期の教育者。父松本万年(漢学者で医業のかたわら私塾を開設)の学舎で漢学を学ぶ。明治8年東京女子師範学校が開設され入学したが、あまりにも学力が秀でていたため、同校教師として採用された。訓導就任付の月給は15円であった。師範学校教授のかたわら父の開いた私塾でも教授をつとめた。明治18年辺地教育に尽くしたいとの思いから秋田県立女子師範教頭となる。明治19年、在家の教育家となる決心をし仏教・キリスト教を学ぶ。日清戦争中は夫人奉公会を結成し、将兵の激励や家族の慰問をした。下田歌子が明治31年帝国婦人協会を組織すると、同会の理事となり、女子教育の普及に尽力した。</p> <p>展示書簡：明治28年11月30日付(日清戦争の参謀本部のあった広島に向かっていた蘇峰に宛て、神戸より) 婦人会より広島に送った500個の帽子の件では、お手数を煩わしましたが、万事都合よくいきました。しかし少々おもしろくないこともありました。先生にお目にかかりたく思っておりますが、お留守で失望致しました。しかし蘇峰先生のお陰で石黒忠忠先生にお会いできお礼申し上げます。いずれお目にかかりご高見を賜りたい。</p>
元田 永孚 (号・東野) 1通	1818～1891 文政1～明治24 熊本県	<p>幕末・明治前期の漢学者・宮内官僚。藩校時習館で横井小楠に師事。明治3年藩知事細川護久の侍読となる。翌年宮内省へ出仕。明治天皇の侍読となる。明治12年藩閥政治を批判し、天皇親政運動を展開するが失敗。明治21年から枢密顧問官。「教学大旨」の起草、「幼学綱要」の編纂等にたずさわり、教育勅語の起草にあたった。</p> <p>展示美術品：「東野元田先生頌徳之碑」の拓本(大幅・サイズ5m50cm×2m40cm)初展示 大正7年10月 侯爵細川護立篆額 門人徳富猪一郎撰 北村信篤書 斉藤善蔵刻</p>

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
元良 勇次郎 (杉田) 7通	1858～1912 安政5～大正1 兵庫県	明治期の心理学者。同志社英学校卒。明治14年東京英語学校(青山学院)の教員となる。明治16年渡米し、ボストン大学、ジョンズ・ホプキンス大学で心理学・哲学・社会学を学び、明治21年帰国。明治23年東大教授となり心理学・哲学を講じたが、特に科学的な心理学研究の開拓の教育における功績は大きい。正則予備校の創立者の一人。 展示書簡:明治38年1月1日 独逸伯林より新年の絵葉書 (前略)或る商人の言に一月二日の夕刻旅順陥落の報の青年間を伝はりたる時の市中の騒ぎは佛軍降参当時と変わる事なしと、其真偽は知り申さず候へども一般の感情を窺ふに足ると存じ候
森 次太郎 (号・円月) 67通	1870～1955 明治3～昭和30 愛媛県	同志社卒。明治34年にエール大学に留学。明治38年に帰国。明治39年、博文館から『欧米書生旅行』を出版。子規の幼なじみであり、夏目漱石とも交友関係にあった。四国の松山中学で教育者・安部能成、兵庫県の柏原中学で政治家・芦田均を教えた。蘇峰とは明治27年頃から交友があった。 展示書簡:昭和10年12月9日付 今夕の新聞紙上にて子規居士に関する記事拝読。「才の美と共に強き意思と大なる野心と精進禁ぜざる向上心」云々は故人に聞かせたら必ず鼻の上に皺を寄せて(居士が会心の言を聞きし時の癖)首肯すべき様と存申候。
矢島 楫子 (本名・勝子) 15通	1833～1925 天保4～大正14 熊本県	明治・大正期の女子教育者・社会事業家。蘇峰・蘆花の叔母。26歳で結婚するが酒乱の夫に苦しみ、家出、離婚した。子供を連れ姉達の家を転々とするが、明治5年、39歳で上京。このとき楫子と改名。40歳で教員伝習所に学び、小学校教師となる。45歳で新栄女学校教師。やがて女子学院長として40年間キリスト教主義の教育を実践。多くの優れた先駆者を育てた。禁酒、娼婦、平和を掲げて、明治19年日本で最初の女性団体「東京基督教婦人矯風会」を組織し、会長となり、一夫一婦制の確立、公娼制度廃止に取り組むなど、社会運動家としての活動も先駆的である。 展示書簡:明治27年8月21日付 8月31日から1週間横浜のフェリス学校において、第2回夏季学校を開設するにつき、大変だろうが9月6日午後4時になんとか演説して欲しい。(要約)
安井 曾太郎 1通	1888～1955 明治21～昭和30 京都	大正・昭和期の洋画家。京都商業中退。浅井忠洋画研究所に入り、洋画家を志す。明治40年渡仏。大正3年帰国。昭和19年東京美術学校(東京芸大)教授となる。昭和24年湯河原に画室を構える。蘇峰宛書簡はその湯河原からのもの。
山本 覚馬 1通	1828～1892 文政11～明治25 会津	幕末・明治前期の政治家。新島襄の妻八重の兄。日新館に学び文武兵学を修得、後江戸へ出て佐久間象山、勝海舟を訪ね、蘭学、様式砲術を研究。会津藩蘭学所を設置し、会津軍近代化に功があった。禁門の変では砲兵隊の指揮を取ったが、鳥羽・伏見の戦いで捕らえられ薩摩屋敷に幽閉されたが、三権分立の思想や教育制度の確立、税負担の平均化、職業選択の自由などの「管見」と題する経世論が認められ、明治2年釈放される。やがて京都府顧問や京都商工会議所会頭として活躍。またキリスト教に共感、新島襄らの同志社創立にも協力した。同志社の名前は山本覚馬の発案であるといわれている。 展示書簡:明治23年3月5日付 徳富蘇峰、湯浅次郎宛、新島亡き後の書簡。
横井 玉子 (隆子) 4通	1855～1902 安政2～明治35 江戸	女子教育者。女子美術学校創立。日本基督教婦人矯風会会員。熊本洋学校卒。明治5年横井小楠の甥横井時治と結婚するが21歳で未亡人となる。その後洋画を本多錦四郎、浅井忠に師事。明治18年から築地の新栄女学校、明治22年から女子学院(新栄と桜井女学校が合併)教授として、礼式、裁縫、洋画、割烹を教え、舎監も兼任。女性の自立を目的とする芸術教育機関設立をライフワークとし、明治34年、本郷に女子美術学校を開校。病身ながら舎監を務めた 展示書簡:明治()年3月24日付

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
与謝野 晶子 (本名・晶) 12通	1878～1942 明治11～昭和17 大阪	明治・大正・昭和期の歌人・詩人。堺女学校卒。関西青年文学会に参加。明治33年、来阪した与謝野鉄幹、山川登美子を知る。明治34年上京。青春の情熱と人間賛歌を歌い上げた処女歌集『みだれ髪』を出版し、鉄幹と結婚。文学のみならず、教育・婦人・社会問題に関する著述も多く、見識ある指導者の役割も果たした。夫・鉄幹とともに文化学院で教鞭をとる。文化学院設立趣意書によると、創立者の西村伊作は学院設立にあたっては、石井拍亭や与謝野晶子に相談し、晶子は文学を担当、指導した。 展示書簡：大正10年「文化学院の趣意書及び規則」(冊子)と「文化学院入学申込書」同封。大正(11)年3月5日 文化学院の第1回バザー開催の手紙。
与謝野 寛 (号・鉄幹) 8通	1873～1935 明治6～昭和10 京都	明治・大正期の歌人・詩人。明治25年上京。落合直文に師事。明治26年「浅香社」結成に参加。「二六新報」に入社。翌年同紙に歌論「亡国の音」を連載、旧派の短歌を痛烈に批判し注目された。明治32年「新詩社」結成。翌年雑誌「明星」創刊。明治34年鳳晶(与謝野晶子)と結婚。短歌革新とともに詩歌による浪漫主義運動展開の中心となる。明治44年渡欧し、パリに滞在。大正2年帰国。大正8年から昭和7年まで、慶応大学文学部教授として国文学・国文学史を講じた。大正10年には西村伊作らと文化学院を創設。戸川秋骨が外国文学、与謝野寛が日本文学を担当した。 展示書簡：明治43年3月11日付 絵葉書 「早速御返筆を忝うし拝見仕候 御手数お煩し候事恐入り候」という礼状
吉岡 弥生 2通	1871～1959 明治4～昭和34 静岡県	東京女医学校(現東京女子医科大学)創立者・医師。漢方医・鷲山養斎の娘として生まれ、明治22年に上京し、済生学会に入学。明治25年内務省医術開業試験に合格し、日本で27人目の女医となる。明治28年に再上京し、昼間は開業をしながら夜はドイツ語を教える私塾・東京至誠学院に通学。同年10月に、同学院院長の吉岡荒太と結婚。明治33年済生学会が女性の入学を拒否したことを知り、同年日本初の女医養成機関として東京女医学校を設立した。明治45年に東京女子医学専門学校に昇格、大正9年に文部省指定校となり、卒業生は無試験で医師資格が取れるようになった。 展示書簡：昭和13年6月3日付 「日伊親善大音楽会」への招待状
和田 栄作 1通	1874～1959 明治7～昭和34 鹿児島県	明治・大正・昭和期の洋画家。東京美術学校(東京芸大)卒。明治32年渡仏し、コランに師事。明治36年帰国、東京美術学校校長となる。明治22年2月11日の「憲法発布の式典」の絵は和田栄作筆である。 展示書簡：明治29年5月15日付 徳富・深井氏送別会(明治29～30年の欧米新聞事業視察に対する)への出欠の返信葉書。

参考文献：コンサイス人名事典(三省堂)・熊本県人物史(日本談義社)・日本女子大学学園事典(日本女子大学)・日本近代文学大事典(講談社)・大人名事典(平凡社)・近現代日本女性人名事典(ドメス出版)・新潮日本人名辞典(新潮社)・同志社山脈(見洋書房)・蘇峰自伝(中央公論社)・高野静子著「蘇峰とその時代」(中央公論社)、「続・蘇峰とその時代」(財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団)・徳富蘇峰宛書簡目録(財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団)・時代の先覚者後藤新平(藤原書店)・徳富蘇峰関係文書(山川出版社)

高野静子・宮崎松代・和田千枝 作成

蘇峰堂便り

「時艱思偉人 蘇叟 九一」(艱時に偉人をもつ)

本年度展示中の蘇峰書によるこの言葉は、多くの艱難辛苦を乗り越えてきた蘇峰自身の、生きてきた姿勢を表わしているように思う。

蘇峰にとつての艱時は、九十四年の生涯の中で幾度も訪れた。内務省勅任参事官に就任し変節漢と言われた時、二度の国民新聞社焼き討ちに遭遇した時、そしてその大切な国民新聞を去らなければならなかった時、その度に蘇峰は一体どんな偉人を頭に描き、そして何を思ったのか。この書の前に立ち、さて自分は困難に際してどんな人物を思うのであろうか、思索してみた。蘇峰のような、スケールも大きく、難易度も高い困難に直面したことはないのだが、自分ではなかなか解決するのが難しい時には、遠い声を聞いてみたくなることもある。遠い先人に問いかけてみただけで、なんとなく救われるような気持ちになったこともあった。

記念館の史料に触れ、強く感じることは、偉人たちが私たちにさまざまな体験を語り、道標となるようなその生き様を見せてくれるということである。しかしその偉人達も決して道を切り開いてはくれない。ハードルを飛び越えるのは自分自身なのだ。蘇峰が困難を前に心に思い描いた偉人の姿は、自身が歩むべき方向を見出すためのひとすじの光明となつたのではないだろうか。

蘇峰のこの書には、困難に対して決して後ろ向きではない、ポジティブな姿勢が込められているように思う。艱時に偉人をもつとき、前に立ちただかる障害を越えるだけの気概が、心の中には既に十分満ち溢れているはずであるから。

宮崎 松代

もちろん字が書けて、読めて、計算ができれば、生きていく上で便利である。基本的にはそれらができた方がいい。しかし「人生にとつて」と考えたとき、それらは光彩を放たない。教育が「読み・書き・算盤」を超えて「魂の部分」に踏み込めたら、「知性」よりも「理性」を育てる余裕がもてたら、素敵だと思ふ。

「教育の目的」と「人生の目的」が一致すれば、教える方も幸福だ。「魂の磨き方」なんて教えられれば理想的ではないか。魂の中の感受性が豊かになれば、真実とか善いものとか美しいものを追求して生きたいと願う心が育つのではないか。

宇宙の神秘の前で驚き、自然の不思議に畏怖し、結局、人間はちっぽけな存在なんだと謙虚な態度で生きることが学ぶ。

教育にそうしたゆとりがあればと思う。

少し前まで、子供たちが戸外で写生をする風景があつた。子供たちは自然の中で絵を描きながら、心の中にいつぱいの養分をおくりこんでいた。山容は春と秋とは異なり、水態も夏と冬とは音まで違った。そんな中でたくさんの方を学んだ。

ゆとりの教育はそんなところにある筈だ。昔の教育、今の教育という平板な論点ではなく、もっと深いところで議論がなされたらと思う。

頭ばかりをいつぱいにしないで、心の方もいつぱいにしたい……

大切な個々の人生、その人生の目的が、教育の目的と重なれば、いきいきと魅力的な教育が生まれるように思う。

和田 千枝

編集後記

・「東野元田先生頌徳之碑」の拓本は本年度初展示で、その大きさに来館者の皆さんは、圧倒されていらつしやるようです。

・2月には、梅とともにジャノメエリカの大木が朝日新聞神奈川版で紹介され、多くの方が見いらつしやいました。

・読売新聞神奈川版のお宝拝見コーナーに蘇峰の米寿の姿を川端龍子が描いた「蘇峰立像」が紹介されました。

(高野静子・宮崎松代・和田千枝)

平成十七年七月二十九日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 徳富蘇峰記念塩財団

〒519-0333 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三二七一一〇二六六

FAX 〇四六三二七一一〇六七七

ホームページ

<http://www.2ocn.ne.jp/~tsoho/>

E-mail: tsoho@peachocn.ne.jp